

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻（日本語学）		学籍番号	04CS050
氏名	楊 静	ローマ字	YANG Jing	国籍 (留学生)	中国
修士学位 論文名 特定課題研究名	「来る、行く」形式の空間的用法 一日中対照研究を通してー				
提出年月日	2008年1月10日	指導教員	新井 高子		
体裁 (論文)	51頁(1頁文字数1200字)	言語	日本語 (中国語含む)		
別冊添付資料等	_____				
キーワード	「来る、行く」形式 空間的用法 意味 使用条件 ホームベース				
<p>本研究はまず基本となる日本語の本動詞の「来る、行く」について、意味と使用条件に分けて考察した。「来る、行く」の意味を以下のようにまとめた。「来る」ー到達点から見て、移動主体がそこへ近づくことを表す。「行く」ー到達点ではないところから見て、ある地点からある地点への移動を表す。ここで、「到達点でないところから見る」と言っているものには、出発点から見る場合と、中立の場合の二つがある。</p> <p>そして、「来る、行く」の使用条件について、次の i)、ii) の二つに規定してみた。</p> <p><b>i) 出発点・到達点・移動主体と話し手との物理的な位置関係に起因する使用条件：行為主体が話し手以外の場合：A 1：</b>(発話時または主体の移動時に) 話し手が到達点にいる場合は、到達点側からの見方しかできない。つまり、「来る」を使い、「行く」は使えない。<b>B 1：</b>(発話時または主体の移動時に) 話し手が到達点以外にいる場合(つまり、A 1 以外の場合)で、しかも、(発話時または主体の移動時に) 話し手が出発点にいる場合には、出発点側からの見方しかできない。つまり、「行く」を使い、「来る」は使えない。<b>行為主体が話し手である場合：A 2：</b>発話時に話し手が到達点にいる場合は、到達点側からの見方しかできない。つまり、「来る」を使い、「行く」は使えない。<b>B 2：</b>話し手が到達点にいない場合(A 2 以外の場合)は、出発点側からの見方しかできない。つまり、「行く」を使い、「来る」は使えない。</p> <p><b>ii) 出発点・到達点・移動主体と話し手との心理的な遠近関係に起因する使用条件：C：</b>(発話時または移動時に) 話し手が到達点にも出発点にもいない場合(つまり、A 1、2 でも B 1、2 でもない場合)には、中立の見方をすることもできるし、出発点・到達点・移動主体のうち、話し手と心理的に近いと考えられる側からの見方をすることもできる。心理的に近いと感じる要素は次のようなものがある。話し手にとって帰属意識が強い場所、発話時に話題になっている場所、または、これから、話題の中心にしようとする場所、話し手にとって身内であると考えられる人等々。※ i) の条件が関係する場合は、常に ii) の条件より i) の条件を優先する。</p> <p>つまり、本動詞の「来る、行く」は意味だけを考えると、比較的単純なものであるが、さまざまな使用場面で「来る、行く」の選択が行われるとき、上述の使用条件に制約され、その用法が複雑なものになったと思う。</p> <p>日本語の本動詞の「来る、行く」の基本用法を解明した上、「ホームベース」という概念を導入し、中国語の「来、去」と対照研究し、日本語の補助動詞の「～てくる、～ていく」と中国語の「～来、～去」と対照しながら、「～てくる、～ていく」を九の型に分類して検討した。日本語の四つの特徴を見出した：一、日本語は話し手のホームベースがその現在位置する場によって強く規定される。二、日本語はかなり話し手のホームベースを重要視する。三、日本語は主に話し手のホームベースで物事をとらえやすい。四、日本語は主体、とくに話し手の状況を、文の中に強く反映させやすい。</p>					

